

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

- 新世紀祝賀・賀詞交換会1
- 理事会報告 海外ニュース2
- 委員会報告3
- 出版文化史逍遙(53) 洋書の歴史雑記帳(VIII)4
- 新・パソコン外論考(其13)5
- Continental Breakfast など6

新世紀祝賀・

賀詞交換会

“新世紀祝賀賀詞交換会”と称し21世紀年頭の洋書協会新年懇親会が1月12日(金)東京・有楽町電気ビル20階、日本外国特派員協会(プレスクラブ)にて開催されました。今回の新年会は57社176名の参加があり、開宴前から参加者一同ウエルカムドリンクを飲みながら、新世紀の幕開けについて協会への期待と各社の計画などを語り合っていました。開宴に先立ち斉藤文化厚生委員長(UPS)より次のようなご挨拶がありました。

“21世紀の初年を迎えました。近代史の幕開けを明治維新と位置付けると西欧先進諸国に追い付け追い越せの指標を以後100年足らずでクリアしました。この日本人の気骨、信念、英知を今日あらためて想起する必要がある。狂気のバブル経済に踊った1980年代、その対応に当たり無為無策に経過した1990年代、そして失われた10年の精算と調整を迫られ今日2001年を迎えるに当たり我々の業界にあっても様々の課題への対応が求められている。この向い風の現状下で協会会員各位はよりポジティブに、各自の経験と英知を最大限に駆使して対応する決意を皆さんと共に新たにす



る事を願っております。”

引き続き会員各位の本年の健闘を願い、鈴木理事長に年頭のお言葉と乾杯の音頭をお願いいたしました。理事長は“新生洋書協会として2年目を迎えた2000年の活動は 1)7月に業界ウェブサイトを開設しアクセス状況も順調であった事 2)共同物流の開始 3)会員増強運動の成果により7社の新規会員加入があった事 4)東京国際ブックフェアに於いてオラ



ンダ年のテーマが成功を取めた事 5)JAIPパンフレット制作の成果が見られた事などいくつかの懸案として取組んだ事に対して結論が出たのご報告がありました。続いて今年度の課題は 1)2001年の東京国際ブックフェアのテーマはイタリア年であり、イタリア書房さんのご協力では是非成功させたい 2)JAIP



WEBサイトコンテンツの更なる充実に期待したい
3) 永遠のテーマである会員増強の継続である。以上の事を踏まえて今年も協会として会員相互が力を合わせ難局に立ち向かって欲しい”とのご挨拶がありました。その後、新会員の紹介などあり新年の賀詞交換行事も相互の交流を一層深めながらつつがなく進行しまし

た。今回の会場設定は会場開設当時の会員である齊藤委員長にお願ひし、従来の大手町パレスホテルとは異なりニューヨークマンハッタン摩天楼さながらの夜景に酔いしれ、素晴らしい料理に参加者全員が舌鼓を打ちながら活気あふれる集いも散会となりました。

(丸善 OM記)

理事会報告

1月22日(月)

1. 以下の委員会報告を了承した。

- ・委員会編成の見直し案を作成したので理事会の審議を要請する。(総務委員会)
- ・新年賀詞交換会は好評であった。費用は例年に比べて低く抑えられた。来年も同会場での開催を予定している。なお、入会検討中の企業より4社が参加した。(文化厚生委員会)
- ・12月中のWebsite Top-pageへのアクセス数は613件であった。(ダイレクター委員会)

2. 文献複写に関する金原理事の報告を了承した。

- ・大手業者が扱う複写論文数は年間60万件を越える。日本全体では100万件を上回ると思われる。
- ・複写文献の納入先の90%は製薬会社、大学・病院等の勤務医である。

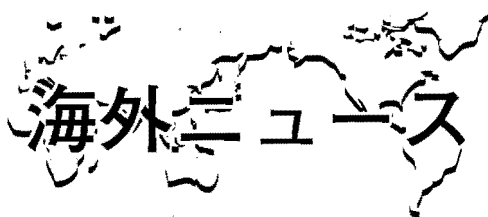
・著者・出版社の著作権保護の立場からみると、文献複写がビジネスとして成り立つ状況は容認できないが、全てを禁止すると社会的に大きな問題を引き起こす恐れがある。

・既に複写許諾権の受託機関として事業を行っている日本複写権センターの機能が不十分であることから新たな複写許諾権受託機関を株式会社形態で設立し、複写利用料の徴収、配分を行う。

3. 海外新聞普及券の入会を承認した。(2月1日付・正会員)

4. 会員各社の現行賦課会費を確認した。

5. 東京国際ブックフェア・イタリア年行事の準備経過に関する理事長(イタリア年委員長)及び事務局長の報告を了承した。



◆ アマゾン従業員1,300人削減

アメリカのオンライン書店Amazon.comは、2001年末の黒字決算に向けて、総従業員数の15%にあたる1,300名を解雇すると発表した。削減人員の内訳は、ジョージア州の流通センター閉鎖で450名、シアトルの顧客サービスセンター閉鎖で400名、さらに本社部門で約450名を削減する予定。

2000年第4四半期(10月~12月)の同社純売上高は、前年同期比で44%増の9億7,200万ドルであった

が、純損失額は前年同期の3億2,300万ドルから5億4,500万ドルへと拡大した。2000年通期の純売上高総額は27億6,000万ドルで、1999年の16億4,000万ドルに比較して68%増、純損失額の合計は14億1,000万ドルであった。

経済アナリストの一部はAmazon.comの業績の伸び悩みに懸念を表明しているが、同社はその主な原因は市場の不活発さにあるとしている。アメリカでの書籍/音楽/ビデオ(BMV = book/music/video)グループの売上高は、第4四半期で11.3%増の5億1,170万ドルで、1998年から1999年の同期における伸び82%に比べると非常に小さな伸びであった。2000年通期におけるBMVグループの総売上高も17億ドルで、伸び率は29.8%にとどまった。

Mr. Jeff Bezos, Chairmanは、この伸びなやみの原因として、事業をグローバルに拡大するための投資、

新しい商品の導入、そして1999年が特に売り上げ好調であったことなどを挙げている。「我々とても現状の下降気味の米国経済の影響を受けざるを得ない」と彼は述べた。伸び率の低迷にかかわらず、アメリカ国内でのBMVグループの営業マージンは7.6%と見込ま

れており、Mr. Bezosは2001年度目標のひとつとして、BMVグループを確実に利益を生じる部門にすることを挙げた。

THE BOOKSELLER / FEBRUARY 2, 2001
PUBLISHERS WEEKLY / FEBRUARY 5, 2001

委員会報告 <文化厚生委員>

フォーティラブ25周年 記念合宿

テニス同好会・フォーティラブはお蔭様で昨年2000年に結成25周年を迎えることができました。

25周年記念合宿は予定通り昨年9月30日、10月1日の二日間、埼玉県秩父市にある秩父ミュージックパークにて大勢の皆様がご参加のもと、盛大に開催することができたことは、新世紀へのフォーティラブのさらなる発展へとつながったのではないかと思います。参加者24名のうち25周年としてOBの方々が5名も参加して下さいました。特に山口 豪氏は山梨県小淵沢より遠路はるばるご参加いただき、またテニスのご指導も丁寧にしていただき大変感謝しております。われわれも今後は参加することだけでなく、指導もできる立場に成長しなければと感じたのは言うまでもありません。初日は晴天の中、朝はAM9:00より森の中の広々とした56面あるテニスコートの中で思う存分テニスを楽しみました。ときおり感じる秋風が汗をかいた体を落ち着かせてくれる、絶好のテニス日和となりました。昼食が終わり、午後からはダブルスのトーナメントを行おうとした矢先、外は雨の音。これは半日つぶれてしまうのかなあと考えていたら、一時間もしないうちに晴れ上がり快晴へ。皆さんの意気込みが通じたのかもしれません。トーナメントは最後まで熱戦の末、鈴木・平野ペアが優勝で幕を閉じました。夜はコテージホールでの夕食、西武系列の宿泊施設ということでオードブルからはじまりスープ、メインディッシュ、デザートなどどれもおいしく、持参したワインも好評で皆さんほろ酔いながらも盛大なディナーパーティーとなりました。テニスでお疲れの方もたくさんいらっしゃるのに、夕食後の飲み会は翌2時くらいま

でビール・ウイスキー・日本酒を飲みながら、秩父錦（秩父の地酒）は特に好評でした。アカベラカラオケ大会も急遽開催し、会話も弾んで楽しい一日が終わりました。2日目は朝食後テニスを楽しみ（中には二日酔いでお休みになられていた方もいたようですが）、昼食後解散となりました。解散後も午後の2時間まだやり足りない方々が暗くなるまでテニスを楽しみ、無事に25周年記念合宿が終わりました。

はじめの場所で、しかも幹事として何とか無事にとりおこなえたのも、皆様諸先輩方のご協力があったからこそとあらためてお礼申し上げます。また25周年にあたり、海外からのJeremy Osborne氏をはじめ、多数の方々からお祝いのお手紙・メールを頂いたことを加えてお礼申し上げます。2001年の第1回目として、3月10日～11日に箱根にて開催されますので是非大勢の皆様のご参加お待ちしております。最後に現在このフォーティラブを支えていただいております会長の西澤氏、幹事の柴田氏、村上氏、川原氏、室伏氏の皆様方にあらためて感謝と意を表するとともに今後ともご指導のほど宜しくお願い致します。

25周年記念合宿実行委員 鶴 竜次（東亜ブック）

新会員を紹介します

会員社名：海外新聞普及株式会社

東京都港区芝浦2-9

Tel：03-5476-8182

Fax：03-3453-4341

代表者：代表取締役社長 四十物文夫氏

主要事業：新聞・雑誌・書籍輸出入、販売、
貨物輸送 他

入会日：2001年2月1日

会員資格：正会員

よろしく申し上げます。

洋書の歴史雑記帳〔Ⅷ〕 吉利支丹と洋書(8)

鈴木 陽 二

◆南蛮地図(3) 南蛮地図屏風

ポルトガルのイエズス会士で地理学者のモレイラ("Ignacio Moreira")は、天正遣欧使節の帰国に同伴して1590年来日した。彼は2年の在日中訪れた九州、瀬戸内方面や京畿地方を天測儀で実測し、また訪問できなかった地域は情報を集めて日本全図を製作した。モレイラ自身が描いた原図は残っていないが、彼の記録や巡察師ヴァリニャーノの記述などから内容が想定でき、その系統に属すると考えられる日本図も3点ほど特定されている。モレイラ図は、この時代の最新の技術を使って製作した初めての日本地図で、従来の図を根本的に改良した重要なものであった(ルッツ・ワルター編『西洋人の描いた日本地図』)。

さて、桃山時代末から南蛮屏風と通称される屏風絵が、異国趣味の流行に乗って盛んに描かれるようになった。その中に世界・日本地図をモチーフにしたものがあって18世紀末ごろまで製作されたが、初期の作品でも二十数点現存している。これらの多くは絢爛華麗な美術作品で、重要文化財に指定されている。装飾性が強く、地図としては必ずしも原図を忠実に写したもののとはいえないが、これだけ精巧な地図が16世紀の日本で描かれたのは、いま想像する以上に海外の情報・資料などが身近なものであったと見ることができる。

桃山時代の作では、現存最古と目されている堺の山本吉右衛門氏所蔵の世界図(京都国立博物館寄託品)のほか、浄得寺系と呼ばれるもので、伝狩野永徳作(疑問視されている)の福井市浄得寺所蔵の6曲の『日本図・世界図屏風』、池田輝政が岐阜城の織田秀信を攻略した際に分捕り現在小林中氏の所蔵になる6曲の世界図・日本図(1595=文禄4年頃)、小浜の河村平右衛門氏所蔵(8曲)などがあり、いずれも桃山時代末期、16世紀末の製作と目され、原図は確定できないもののポルトガル製の地図であったという。

続く江戸初頭には一層絢爛たる画風の地図屏風が生まれたが、それらはイエズス会の絵画教育を受けたイエズス会画派と呼ばれる日本人絵師の手になる芸術性豊かなものであった(三好唯義『図説 世界古地図コレクション』)。そのうち神戸市立博物館所蔵『四都図・王侯騎馬図屏風』8曲、南蛮文化館所蔵の『十二都市図』(6曲)、宮内庁所蔵『二十八都市・万国絵図』

(8曲)、香雪美術館の『レバント戦闘図・世界地図屏風』(6曲)などが代表的なもので、いずれも原図は1609年にアムステルダムで刊行されたカエリウス(Pieter van den Keere)の世界図(メルカトル図法)と見られているので、この地図も当然日本に入ってきたといえるであろう。カエリウスの地図はアムステルダムの有名な地図メーカーW、ブラウが1607年に製作した世界図の一部修正海賊版であったという。西洋画は江戸時代後期(18世紀後半)の司馬江漢が優れた作品を残しているが、その200年も前の桃山時代から江戸時代初期にかけて洋風画の傑作を生んだ日本文化の重層性に改めて感嘆する思いである。

1600(慶長5年)、関ヶ原の合戦で家康の天下掌握が決定したその年に、初めてのオランダ船リーフデ号が臼杵湾に漂着した。そして、乗船していたイギリス人ウィリアム・アダムスが家康の信任を得たことが転機になって、西洋文化の摂取が南蛮から紅毛へと移り変わることになった。そういう意味では、桃山時代と江戸初期の地図屏風の手本となった原図の交替が、この歴史の転回と無縁ではなかったのだろう。

キリシタン大名大友宗麟の庇護で、臼杵はキリシタンの諸施設が生まれ、宗教会議が行われるなど、キリシタン布教の中心的都市となって豊後のローマと呼ばれた。その臼杵がくしくも海外の新しい文化、紅毛文化の受容の戸口になり、またひとつ西洋との修好の役割を果たすことになった。臼杵の町に、その歴史を物語るような遺跡は今では見ることはできない。しかし、この町で生まれた野上弥生子が「まっ直ぐでない通りをどこかへ曲がれば、たちまちどの寺かの楼門が見え、白い土塀がつづき、本堂の高い屋根があおがれた」(『新潮』)と記したような城下町の町並の美しさは今でも残り、曲がりくねった小路を気ままに逍遙するときなど、また、平安から鎌倉時代に造営されたという60余体の石仏群(国宝)をすがすがしい山あいに見出して拝観するときなど、歴史の重みの漂う静謐の町「臼杵」に心が吸い込まれるような思いがする。(参照文献：中村拓「南蛮屏風世界図の研究」／高橋正「南蛮都市屏風からカエリウス世界図へ」／織田武雄『古地図の博物館』)

(元丸善本の図書館長)

◆ Alone together./ふたりがともにいれば……。

子不語怪力亂神

The topics the Master did not speak of were prodigies, force, disorder and gods.

(論語／述而・Confucius:The Analects／BookVII)

【超拙意識；先生は「怪異なこと、超自然的な力、無秩序、鬼神」について、弟子たちには「教訓」としては語られなかった。】

【自註；注釈書によっては、「怪力」「乱神」と二項の説もありますが、ここでは、通説どおり四項、かつ、「怪力亂神」については一切語らないとする説ではなく、日常的には弟子たちにも話はしたが、「講釈」はしなかった、という「徂徠」説に与みしてあります。】

★パソコン英語寸話

今回は、パソコン回りのことで気になっていることを羅列してみたいと思っています（もちInternet関連ですが）。ここで言っておかないと機会が……。

・昨年12号に登場の畏友（パソコン歴23年、現時点では、まだ高速機を購入。生涯29台目）の体験談。

Internetが、かつてのマシンより高速に動作するので、嬉しくなりバンバンとnet-surfing（情報波乗り遊び）したそうです。もちろん、browser（＝閲覧ソフト）は米Netscape社のNetscape Navigator（＝敢えて訳せば、「情報景観航海者」、navigateの方は、おなじみの操縦する意味。自動車の助手席でのそれは、後発意味）を使用。某社のIEは本能的にきらいとか……。

それはそれとして、問題はこれからなのです。大手どころのinternet provider（＝供給者、internet接続業者）と契約。で問題は、使い初めて1か月半後の電話代。請求が9万数千円きたそうです。「某website」を見た際に「勝手に設定（setting）を書き換えるソフトが、潜り込み」以降、NTTの誇るダイヤルQ²に接続してから、物事が始まるシステムになっていたようです（いつものようにroutineとしてinternet経由でアクセスしていた彼は、どの電話番号に繋がっているかなんて見ていなかった。掛け放題だから……）。

畏友の迅速な対応は、まずnotoriousなQ²に接続できない手続きをとったそうである。ついでに、国際電話にも接続できないようにしたそうである（パソコンの専用回線のみ）。最近では、悪質なadult-siteを運営

しているところなどはopenすると、国際電話経由と言った手口もあるそうです。気をつけてください、とは畏友の伝言でした。

・Internet上で自分のsite(web-page)を開設する際にも、またmailを貰うにしても不可欠なものに、「住所」にあたる「domainドメイン名（本稿2000年6号にて紹介）」は、いままでは英語のアルファベットしか使えません。

これが、本年（いつ頃からは未定）から『日本語』名が使えるということで、いまやlame-duck状態のやんごとなき方の口癖「IT」社会のnew-businessとばかり、昨年秋頃からの「日本語ドメイン名」獲得競争が起っていました。

このドメイン獲得の大原則は、【first-come-first-served-basis（早い者勝ち原則）】です。したがって、漢字（2byte文字といいます。これに対して、半角アルファベット文字は1byte文字）名を使った「日本株式会社.com」といった使用が可能と言うことで、解禁となった瞬間アツという間に、有名企業・超有名人等はもうすでに埋まっている（取られている）状態。まあ、それを高く売る目的で「オークション【auction-site】」に出している輩もいます。これを、【cyber-squatter（電子脳会社の無断居住者＝不法占拠者）】といいます。

この現象に関して、「どうして、漢字で……」ということです。超有名会社等々、あせることはありません。漢字登録は、自ら、Internetを放棄して、Domesticでいいということを宣言したことになりますから……。

結論は自ずとでます。

・新WinのMe版のスタートボタンのところを見ました。

プログラム	← Program
最近使ったファイル	← Documents
設定	← Settings
検索	← Find
ヘルプ	← Help
ファイル名を指定して実行	← Run
ログオフ	← Log off
Windowsの終了	← Shut Down

左側の日本製Winの訳語の良し悪しは別として、Runに関してはうん？という感じです。まあ、終了の際もスタートボタンのところにくる設計が、筆者には馴染めませんが……。以下次号。（乞うご期待）

Continental Breakfastを耳にすると、2、30年前にイギリスから帰国途上に泊まったバリ科大学やウィーン大学の学生食堂で食べたパンとバターとコーヒーしかない簡素な朝食を思い出す。それは、学生証明書(Overseas Student Certificate)をロンドンの学生連合事務局からもらって、イスタンブールから空路で帰国する前に、ヨーロッパ4ヶ国(オーストリア、フランス、ドイツ、ギリシア)の諸大学の学生寮に安価な宿泊費で泊まり歩いたときの話である。しかし、最近20日間ばかり4ヶ国(ドイツ、フランス、スイス、イタリア)を回ってみて、それぞれの国の各ホテルで出された朝食はいずれも共通して種類の多いものだった。

テーブルにつくとコーヒーかティーのどちらを飲むのか聞かれる。ティーというとミルクかレモンか聞いてくる。ティーは白い容器に入れて持ってくるが、ティーカップには4、5杯分もあるほどの量である。飲み過ぎないように注意しないと後で困ることが生じるかもしれない。

あたたかい飲み物はティーかコーヒーだけで、その他は冷たいものばかりだった。しかし、その種類は多く、ジュースはオレンジ、アップル、時にはキャロットジュースもあった。コーンフレーク類も薄片状のもの、粉状のもの、粒状のものなどがある。一般にこれらを適当に混ぜ牛乳を入れて食べる。食べやすくするため砂糖を入れることもある。ただし、あたたかいオートミールは残念ながらこのホテルの食卓にも出されなかった。

次にハムとチーズを皿に取る。それぞれ1種類のこともあれば数種類のこともある。特にチーズの種類が多いことに驚かされる。色も薄黄色のものや橙色のもの、硬いもの、柔らかいもの、塩味が強いものなど、銀紙のようなものに包んであるものもあればそのまま出されるものもある。さらにヨーグルドも種類が多い。プレーンなものからいろいろなブレンドものも並べられている。

パンはトーストはなく、ロールパンや固いフランスパンや甘味の強いパンがある。また、パンにつけるのはバター以外に様々なジャムがある。これは日本のホ

テルで出される洋食についているものと同じだが、グレープ、ストロベリー、オレンジなどがある。

一方、アメリカでの朝食では、卵料理が付き物だった。フライ(fried)にしたり、スクランブル(scrambled)にしたり、目玉焼き(sunny side up)にしたり、ゆで(boiled)卵にしたりして出されるが、私が訪れた西ヨーロッパでは、冷たくなったゆで卵が時折置いてあるだけで、給仕する人はティーかコーヒーを出す以外の仕事はしない。あたたかい焼きたてパンやパンケーキを食べたいと思っても朝食では冷たいものしか食卓にのぼらなかった。これは四つ星ホテルでもそうである。

クッキー類は自由に食べられるようになって

はいるが、一通り食べると、クッキーを

食べなくても満腹感を覚える。食事作

法のほうは、「朝食は静かに食べる

もの」というしきたりがあるらし

く、食卓では小声で話し周りに迷

惑にならないよう心がけているよ

うだった。全般に、ホテルの朝食

がそれぞれの地元の家庭での朝食

が反映されてるようで、朝の出勤の

関係で、食事の手間をかけないという

方向に進んでしまったのではないだろうか。

イタリアは食生活が豊かである。メニューに

はオードブル、第1、第2、第3段階と区別してリス

トにしている。さらにそれとは別にワインのメニュー

があり、何ページにもわたって生産された年度も入

ったリストである。赤ワインか白ワインなどしか馴染

みのない私にとって注文するにも骨が折れる。食事の

ほうは余程の健啖家でないと最後の第3段階のメニュー

までたどりつけない。オードブルとスープ

(suppa) でかなりの満腹感を覚える。またコース料理

もその種類が充実している。

イタリアは食事に時間をかける。2時間をかける食

事も珍しくない。レストラン(ristorante)に入って

指示されたテーブルに座ると、しばらくしてメニュー

を持ってくる。しかし、なかなか注文を取りにこない。

こちらが早くしろという意味のジェスチャーをする

と、あなたたちが早く食事をしようと思ったら、この

レストランにはお入りにならず、ピッツァ料理店

(pizzeria) か喫茶店(bar) にでも行かれたほうがよ

いですよ、とにこにこしながら話しかけた後別のテー



ブルの方に行ってしまう。

食事の注文は飲み物から始まる。イタリア語ができない客だと知ると、Liquor? と聞きにくる。赤ワインか白ワインまたは地元自慢のワインを注文するのであるが、ボトルか、その半分か、1/4か言わねばならない。地元では1日に1リットルも飲むのが普通だそうだ。

ある時、オードブルに鮭の燻製 (smoked salmon) を注文したが、日本では二人分以上の量だ。こういう場合、二人以上で行くと分け合うことができるので便利である。第1段階では普通スープかサラダを頼むわけであるが、どちらも量が甚だ多い。しかし、おいしいとつい普段の量より余計に食べてしまう。人間の胃袋も伸縮性があるものだと気づく。

メインな料理は魚料理か肉料理である。魚の種類は日本よりも少ないようだが、肉の種類には、ビーフのほかに子牛、レバー、鹿肉、鶏肉、鴨肉、ウサギ肉などがある。中国では犬、猫、蛇、蛙なども食べるが、こちらではその食生活の習慣はないようだ。サラダなどは肉と同じ皿に載せてくるので、注文をしなくても十分な量である。

水は日本では当然のように食卓に出されるが、こちらではミネラルウォーターを注文しなければならない。天然水はイタリアでは、アクワ・ミネラレ・ナチュラレ (aqua minerare naturale) と言って注文する。そうしないと炭酸を入れたものが出てくる。ドイツではそれが普通で、ガス抜き、つまり「オーネ ガス、ビッテ」(ohne Gas, bitte.) という必要がある。

レストランで食事をするということは夜を友達とゆっくり楽しく過ごすということのようだ。注文の時間、勘定や支払いの時間などは長い、その間友達といろいろと話し合えると思うと、それはそれなりにいいのではないかと思ったりする。しかし、能率の点では日本のほうがはるかに上だ。メニューを置きっぱなしにして注文を数分過ぎてからくるようなことはないし、勘定に数分もかけることはない。また勘定を間違えることもないのは安心できる。これと同じことを期待するならマクドナルドなどのファーストフードレストランに行くことしかないだろう。

イタリアでは食事にかかる時間が長いので、食べながらいろいろな考えが思い浮かぶ。たとえば、食べるだけでなく、どのようにしてこのような味を出しているのだろうかとか、自分もこのような料理を作ってみ

てはどうかという気持ちにさせられる。つい、イタリア語で書かれた料理の本を買ってしまったが、写真などを頼りに料理を創作的イメージで見直してみたいと思う。

今世紀の初めに、同僚の先生と数人の女子学生と共にイタリアに行ったのだが、昔の学生より今の学生のほうが自己主張や自己管理がしっかりしているのではないかと思った。イタリア語が分からなくてもメニューのリストを指差して、What's this? と聞いて確かめる。また注文を取りにくる人がどうしても英語が分からなければ、適当にメニューのある個所を指差し、This, please. と注文する。発見の喜びを楽しもうというわけだ。また、互いに話し合い、「量が多ければ、半分食べて」、などと言って協力し合うのである。学生たちはイタリア語が分からなくてもしょげることが全くなく、若い世代の生きる逞しさのようなものを感じた。また、食べた料理と料金の請求との間にギャップがあると—これは何度かあったが—もう一度メニューを見せるよう要求し、メニューの値段を確かめ、手持ちの計算機を取り出し請求書の値段をチェックする。もし、間違いが見つかりと堂々とその間違いを指摘し、修正を要求する。

日本の海外旅行者がよく儲けの対象とされる話を聞くことがあるが、日本の若い世代はそんなことができることを相手に認識させたのかもしれない。カードで払う場合、請求額の間違いを指摘すると、店員はカードの請求をやり直すのは面倒なので、現金で間違った差額を返すケースもあった。金銭的な問題と時間的な問題が改良されれば日本人はイタリア料理をもっと楽しめると実感した。

5ヶ国語旅行会話集のような本が発売されているが、小型化した英和辞典だけでなく、5ヶ国語8000語辞典のようなものが普及し、携帯していくととても便利ではないかと思った。eメールなどの印象から、英語が世界を覆い尽くすのではないかと考えている人が少なくないようだが、未だ、A little language goes a long way. である。しかし、A little language goes a wrong way. のこともあるので、お互い注意したいものだ。つまり、訪れる国のことを少しでも知って入れば大へん役立つこともあれば、生半可な外国語の知識では失敗することもあるということだ。

(茨城キリスト教大学教授)



SAGE Publications

注目の新刊**Sage Masters of
Modern Social Thought Series****E dward
S aid****Edited by
Patrick Williams
Nottingham Trent University****研究論文選集****エドワード・サイード****2001年刊 新着/在庫 全四巻函入り 1664頁
147,250円(税別) ISBN 0-7619-7054-1**

エドワード・サイード(1935~)が1978年に刊行した「オリエンタリズム」は、東洋に対する西洋の文化的ヘゲモニーの根源を解剖・批判して、大きな反響を呼び起こしました。西洋近代におけるオリエン研究は、対象をありのままに理解しようとするのではなく、彼我の分離・対比を前提とした虚構の体系であること、それにもとづく研究・教育機関やメディアの言説は、帝国主義・植民地主義の表面的な正当化というより、むしろ西洋による東洋の統制・支配を推進する内在的な力の源泉として作用していること、を暴露しようとした同書は、ポストコロニアリズムの展開の重要な契機となりました。

今回の選集に再録される79篇の論文は、パレスチナ出身の知識人・批評家としてのサイードの基本課題や立場、「オリエンタリズム」自体への評価と論争、同書や「文化と帝国主義」(1994)の視点や手法を手がかりとした、知識・文化諸領域の批判的再検討の試み、知識人と政治的实践との関わりをめぐって、ファノン、ジェイムソン、チョムスキーらとの比較、などのテーマを扱っています。文芸批評、カルチュラル・スタディーズ、人種・民族問題、社会学、人類学、政治学などへのサイードの寄与と影響を評価するために、不可欠の資料を提供する企画です。

総代理店

**ユナイテッド・パブリッシャーズ・サービス社**

東京都千代田区神田駿河台2-9 研究社ビル 〒101-0062 ☎03(3291)4541 FAX.03(3293)3484